三章 最後の一刺しを

　大陸の西端近くにある聖地から遠く、東方にあるグリザリカ王国。

　王都を象徴する建物である王城の離れの塔に、一人の女性が住んでいる。

　線の細い、不健康さで成長しそこねたかのような小さな女性だ。くすんだ金髪を広げて寝台に寝そべる彼女は、王家直系の長子でありながらも身体の弱さゆえに表立った活動実績はなかった。末娘ながら、よくも悪くも目立っているアーシュナとは真逆の生き方をしている静かな姫だ。

　全身を震わせて、をする。ぽっきり体が折れてしまうのではないかと心配になるほど弱々しい姿だ。

「この体も、いい加減、限界じゃのう」

　に聞かせるともなくいた彼女は、もとに置いたこぶし大の水晶玉に手を伸ばした。

　ただの水晶ではない。古代遺物と称される、純粋概念を活用して隆盛を誇った時代につくられた導器だ。現在よりかに発展していた千年前の文明期に製作された導器は貴重だ。現代では再現不能な機能を有していることが多いため、起動が可能なものは特に高値で売買される。

　いま彼女が持っている水晶玉には、魂に宿る純粋概念の性質を精査する機能があった。

　オーウェルの死後、が率いる異端審問官の調査によりグリザリカ王家保有のものが多数押収された。召喚陣に使用した素材や人員はともかく、こればかりは惜しかったので彼女のずから確保した。

　各地で発掘される古代遺物が、千年という年月を経ても故障することもなく起動するのには理由がある。

　古代文明の後期の魔導技術は物質を不滅とする魔導構成を見出し、導力機関を永久機関に等しいものへと発展させていた。この水晶も、その技術の恩恵に預かっている。

　異世界人召喚という禁忌を犯したによって、先代のグリザリカ王は処刑された。先代グリザリカ王は、首を落とされる寸前までの死を信じることができなかっただろう。あの時の異世界人召喚は、グリザリカ王国の大司教であったオーウェルの協力はもとより、ここにいる彼女の許可も得て行われていたのだから。

　だが、先王はひとつの勘違いをしていた。

　ここにいる彼女はグリザリカ王家に巣食うものだ。王家の守護者ではない。寝台に寝そべる女性が自らの血縁のことを消耗品としか見ていないことを先王が知ることは、までなかった。

　すでにグリザリカ王国での王位継承争いは終了している。もっとも目立っていた末娘であるアーシュナが不在ということもあり、順当に長男が継ぐことになった。骨肉の争いが繰り広げられる中、彼女は寝台のなかで静かに寝そべっていただけだ。

　なにもしない王族。ただ生きているだけのお飾り。一切の職務も担わない眠り姫。

　彼女を知る多くの者は、彼女のことを無害な存在だと信じて疑っていない。

　だが知る者は知っている。

　ここにいる彼女こそが代々グリザリカ王国を牛耳る存在、【防人】である。

「異世界人の、憐れで罪深いことよのう」

　瘦せこけながらもまだ若い女性は、老成した口調で水晶玉を手元で遊ばせる。

　この導器で調べた概念は、直近では二つ。

【無】と【時】。

　異世界からの来訪者『迷い人』については、が過剰なほど厳しく取り締まっている。実際、片割れの純粋概念【無】はすぐに処分された。だが実のところ本当に危険な、それこそ世界が滅びるほど強大な純粋概念というのはである。

　世界的なレベルで対処不能という事態に至ったは四例しかない。

　白濁液に浸された北の【星】はとなって久しく、いまとなっては無害に巡っている。霧によって南の大洋に閉じ込められた【魔】、世界にる『』ならば群れで人類を滅ぼすことができる。かつて『塩の剣』でされた【龍】のならば、この星を物理的に砕くこともできただろう。無限に等しい時間さえあれば、東部未開拓領域『り』にいる【器】ほど恐ろしいものもない。

　純粋概念がになる時、その【力】は大きく膨れ上がる。なによりも概念の性質が世界にどう関わっているのが肝要だ。

　世界に干渉できる純粋概念。

【時】。

「……ふむ」

　彼女はおもむろに、毛布をのけて立ち上がった。

　外が静かすぎる。

　彼女がいる塔は閑静な場所を選んでいるが、耳に痛いほどの無音となれば話は別だ。ゆっくりとした足取りで窓辺まで向かい、力なく窓枠に寄りかかって外を見る。

　世界が停止していた。

　飛ぶ鳥も舞い散る木の葉も王城に勤める人間も、すべてがぴたりと止まって動かない。

　概念的な時間の停止。導力によって起こる魔導現象に、物理的な摂理を当てはめることなどナンセンスだ。

「五例目が、生まれるか」

　聖地にはエクスペリオンを向かわせた。【魔法使い】のいる聖地がどうなろうと、彼女の主人である『主』がなにをしようと、アーシュナの回収が間に合っていればかまわない。

　千年前、純粋概念を活用して隆盛した古代文明期に試みられた不死実験を生き残ることができたのは、四体。

　幼くか弱き純粋概念【魔】の原罪概念を移植して肉体的な不死身を達成した【盟主】。力強く巨大な純粋概念【龍】のありように着目して導力構成の理想値に血肉をつけることで発生した生命体である【魔法使い】。輪廻すら耐えきる純粋概念【星】と同様に摩耗することなき魂にて転生を繰り返す【星読み】。

　そしてグリザリカ王国にいる【防人】たる彼女は、増殖を繰り返す純粋概念【器】を利用して精神という点で不死を目指して作られた完成品だ。自分の血縁に限られるものの、肉体が死した後には精神を移し替えることができる。

　いまの肉体に乗り移ったのは失敗だった。全盛期のこの体は素晴らしく健康的で愛らしくあったのだが、いまやこのざまである。

　窓辺から寝台に戻る。それだけで力を使い果たしてしまう。

「アーシュナは大事でいとおしい、次のだからのう」

　彼女の操り人形であるエクスペリオンがいるのだ。アーシュナの心配は不要である。

　気がかりがあるとすれば、むしろここから東。

　精神を移し替えて千年の時を生きる彼女をもみかねない別次元の摂理を広げる、しいだ。

　東の白夜と、南の白霧。

　四大を閉じ込めている二つの結界は、全盛期の【白】の純粋概念を持つ異世界人が行使した魔導だ。

　世界回帰によって、完全に近かった二つの結界にはができつつあった。そこに【世界停止】の重みが加われば、千年続いた結界は砕け散る。

　グリザリカ王国に巣食う【】は、未来を占うように水晶玉を掲げた。

「星の終焉まで引きこもっておればいいものを……やれ、忌々しいのう」

　同族嫌悪を抱えて、千年生きる彼女は吐き捨てた。

　東部未開拓領域『絡繰り世』。

　白夜に包まれたつくり物の世界は、【時】のによる停止から逃れて営みのルーチンを回し続けていた。

　世界すべてを停止させる【時】に干渉されない領域の中心で、がこぼれた。

「……忌々しい」

　ソレは、世界が停止しても増え続けていた。

　心が、感情が、人格が、精神が、魂が、秒を刻むまでもなく増えていく。常に吐き出し続けていかなければ自分を見失う。いや。もしかしたら、とっくの昔に失っているのかもしれない。自分が自分だと思っているのは、果たして自分なのか。本当の自分なんてものは、すでに増殖して切り離したどこかで独立しているのかもしれない。わからない。わからない。それは自分が彼女なのか彼なのか、単体なのか群体なのか、自分なのか他人なのかすらわからない。

　それほどに、増え続けていた。

　ここにいるのは、千年前よりさらにって行われた実験の失敗作だ。

　記憶の大図書館『星の記憶』が生まれる前に試みられた実験。純粋概念行使による記憶の消費に対抗するための改造だった。

　人は記憶を失えば人格を喪失する。純粋概念の行使で人格の消失と同時にと化すのならば、人格を増やせばいいと考えた。

　だがソレが受けたのは、成功しなかった実験だ。

　人格が増殖すれば、人の心はしされる。秒速で増殖し続ける人格に元来あった精神は圧迫され、当初の試みとは裏腹に【器】の制御はかなくなった。

　人間だった頃のソレは必死に己を保とうとした。増加と同時に人格を切り離すことにより、分離した部分がとなって生まれ続けることになった。運がよかったのは、切り離されて増殖を続ける人格の一つ一つが、としてはあまりにも規模が小さかったことだ。

　生まれ続ける、三つの原色。

　鉱石の性質に近い結晶は、増え続けたソレの魂であり、精神であり、肉体であった。

　赤、緑、青。三原色の結晶がぼろぼろと体からがれ落ちる。心の色だ。存在するそれらすべてが、としての在り方を内包している【器】だ。

　一個一個は、一人の人間にも満たない。一人だっただ。破壊的な力はなく、概念的なみを生み出していくわけでもなかった。【器】の純粋概念はソレの増殖に伴って世界の許容量を増やしていく。一つの【器】のが生まれるたびに、世界がほんの少しだけ大きくなっていく。

　小さくとも多すぎる切り捨てたものが、結合して人格を結晶化させるまでは。

　切り離した余剰にすぎないのに、元となったソレよりもよほど情緒豊かに振る舞う知的生命体たち。

　三原色の魔導兵。

　この世界で唯一の、人間以外の知的生命体。人間をベースとして生まれる原罪魔導の悪魔とは異なり、人類を元としない、まったく別の知性体だ。

　彼らは『絡繰り世』から出ることもなく、ソレを採掘して世界を作り上げている。本体がいる場所を中心として、十三の区域に分けている。さらに言えば、次の段階へと移行する計画すら立てていた。なぜならばここに住まう三原色の知性体は、こんな星など切り捨てることに迷いはないからだ。

　自分が生み出したものが、自分の心象風景以外の世界を構築している。

「ああ、忌々しい……」

　時間の停止すら、ソレの増殖をとどめることなど叶わない。無限に増え続け、無制限にとりいていく存在だからこそ、『絡繰り世』と呼ばれている。

　世界とソレの増殖を隔てるのは、白夜だけだ。

　全盛期の白が創った人造の太陽。横転を続ける白輪が、とうとう時間の重みに耐えかねて転がり落ちようとしていた。

　世界に満ちる。明けない夜が開かれれば、外の世界に増えすぎたソレの重みがし掛かる。千年で増え続けた重量が突如加われば、地軸をずらし星の自転と公転すらもゆがませかねない衝撃が発生する。

　それほどに、ソレは増え続けている。

　だが『絡繰り世』に、星を害する意図はない。

　なにもかもがわしい。増えるしかできない。減ることなどない。排出を続けても、とても追いつかない。ビックバンより続く宇宙の膨張のように、ソレは拡大を続ける。

「ああ──忌々しい」

　自分が一つになるまで増え続ける存在は、自己が抱える矛盾への嫌悪を吐き捨てた。

　世界への隔意はあっても害意はない。世界に積極的な害があるとすれば、ここより南。

　霧の中をう怪物に他ならない。

「あはっ！」

　幼くな笑い声が上がった。

　この世界で唯一ある大陸の最南端、リベールの沖合からか南方の外洋まで広がり続ける霧の中。人の悪意よりもおぞましいな声が躍る。

　くすくすと肩を震わせる幼女の周りで、霧がむ。世界の停止に対してすらおうとする。同等の概念同士がぶつかり、する。停止した世界にあって、霧は静かに渦巻き、まとわりつく。

　世界が回帰しても、中にいる存在に影響をぼさないほどに強固だった霧の結界が揺らいでいるのだ。

　この結界にはすでに亀裂が入っている。広がり続け、とうとう空の青さすら見えてきた景色に『』は胸を躍らせる。

　まずは停止した世界をしよう。

　まった世界で怪物たちがれる様もまた、Ｂ級映画らしくてとてもいい。世界が止まるほどの魔導であろうが、純粋概念【魔】より生み出されて千年のを勝ち抜いた魔物たちならば抗える。の封印に特化した【白】の結界に比べれば、世界規模で広がる【時】のほうが動きやすい。

　村で、町で、都市で、大小関わらず止まった中で怪物だけがく世界。きっと時間が停止した世界の中でもどうしてか動ける人間が何人かいて、その選ばれた英雄たちが暴れる怪物たちと必死に戦うのだ。

　なんてチープなだろうか。実現するまでの時間がもどかしくてたまらない。

「もう少し、あとちょっとよ！　頑張り【時】だわ！」

　万魔の解き放たれる時を待ちわびて、彼女はくるくるとステップを踏みながら、新たに生まれたに声援を送った。

　トキトウ・アカリだったは、止まった世界に立っていた。

【時】と化した彼女の思考は、時間の正常化にこそある。

　時計の針を合わせなければならない。何度も繰り返されたせいで、世界は本来あるべき時間とズレすぎている。概念と化した彼女と時間を合わせなければならない。

　時間に抗い、世界の針をくるわせるものたち。

　彼らはことごとく、摂理に反した存在だ。

　時は誰にも平等でなくてはならない。何人も逃れることなど許されない。だから、この世界でも動く存在があれば、【停止】させる。

　例えば、時間の調律にわれる【時】のの正面。

　止まった世界で、音がした。

　すべてが静止していた。

　風音一つ立たない。一つ動くことはない。生体も物体も、固体も液体も気体も、概念的な魔導にさらされ時間の牢獄に閉じ込められていた。

　世界が停止している。

　先ほどまで戦っていたですら例外ではない。

　の暴威によって停止した世界の中で、メノウは意識を保っていた。顔を動かそうとして、肉体が固定されていることを悟る。瞬き一つできない。その割には、体内の生命活動は問題なく行われている。

　世界を停止させるほどの【時】の魔導行使の中で、どうして自分の意識があるのか。

　理由は一つしかない。いまもメノウとアカリをつなげている導力接続の影響だ。

　一度、魂レベルで同化してできた魔導的な経路から【時】の純粋概念が少なからぬ影響をメノウに及ぼしている。となったアカリからあふれて伝染する【時】の概念が、皮肉なことにメノウを【世界停止】の魔導行使から逃れさせていた。

　ならば、さらに影響されれば。

　メノウは純粋概念をあえて自分の肉体に引き込む。引き込んだ瞬間に記憶が削れる想定もしていたのだが、アカリの魂からメノウへとれ落ちてきた純粋概念は、ただあるがままにあるだけだった。

　時間の概念を自分の肉体にう。高度な集中力を要する魔導操作は、なんの偶然か、導力迷彩の要領に近かった。

　メノウがしていることは、自分の本質を変化させるに等しい行為だ。漂白されて、染まることのなかった性質をアカリから引き込んだ色に染めていく。

　そうして、どれだけの時間がったか。

　もちろん世界の時間は一秒だって進んでいない。だが停止したままの世界とは裏腹に、メノウの体が自由を取り戻し始めた。

　メノウの肉体が、【時】の概念で色づきつつあるのだ。

　精神には純粋概念の影響が及ばないように注意をする。感覚的に、メノウが純粋概念の魔導を使わなければ記憶を削る心配がないことはわかっていた。

　足を一歩、踏み出す。空気があまりにも重い。改めて地面を踏みしめれば、塩の大地は凍ったかのように固まっている。それでいながらメノウが踏みしめた部分だけはわずかに動き始める。

　時間が止まった世界をメノウはに歩く。

　いまメノウが見舞われている現象が、この周辺だけにとどまっていないことは本能的に悟っていた。

　世界が静止している。

　人が時間と関わるすべてが停止している。

　いままでアカリが使った【停止】の魔導は、ここまで大それた効果を発揮していなかった。指先から発射された導力光が直撃した相手の時間を止める。もちろん強力な魔導ではあったが、効果範囲は限定的だった。

　同じ純粋概念でいながら、まるで規模が違う魔導行使。

　アカリが純粋概念を暴走させた。になった。記憶と人格がなくなって人間性を失った。

　受け入れがたい現実を受け入れる。たとえ一時のことでも、アカリと離れてしまったことを痛切に後悔する。

　相互に記憶を共有したばかりだ。アカリの暴走には、なにかしらの介入があったのは間違いない。絶対に許さない。私刑になろうと犯人は必ず見つけ出して報いを受けさせる。

　固く固く誓いながらも、メノウは止まった時間の中で動きを取り戻していく。

　だが黒幕を探るよりもまず先に、しなくてはならないことがある。

　怒りや後悔すらも糧にして、前へ。

「アカリ……」

　泥の中を進んでいるかのようだ。粘度の高い空気をかき分けて、前に進む。

　ようやく発することのできた呼びかけに、アカリが反応した。となった彼女が、能面のままメノウに指を向けた。

　明らかな、攻撃姿勢。

『導力：接続──不正定着・純粋概念【時】──発動【人体停止】』

　一瞬だった。

　い通りメノウの肩に【時】の純粋概念が着弾する。人体に限定することで【停止】の効力をさらに高めた概念魔導。メノウは効果に逆らわない。自分の肉体に影響を及ぼそうとする純粋概念の性質を飲み込み体になじませる。【時】の魔導を飲み干すように自分の体に定着させる。

　さらに一段階、メノウの性質が純粋概念に染まる。

　なんとか停止を免れたものの、メノウの意識も完全ではない。思考がかったるいほどに鈍っている。体力が半減したかのような倦怠感が肉体を取り巻く。

「……？」

　自分の魔導がに通じていないことに気がついたのだろう。アカリの姿をしたが、小首をげる。純粋概念の食い合いならばともかく、自分の概念が同調されていることがせない様子だ。

　時間停止したメノウの動きは緩慢だ。いくらでも対処のしようはあるだろうに、アカリは直立したまま動かない。動かない意味はわからない。の思考に合理性を求めることが間違いだ。『』が【魔】のままに振る舞っているのと同じく、いまのアカリも【時】の針が示すままに直立している。

　本当に、となってしまったのだ。

　絶望の底に叩き込まれる事態でありながら、それでもメノウには希望があった。

　メノウの中には、アカリの記憶がある。

　塩の大地に来る前に導力の相互接続で受け取った思い出だ。もう一度、魂の共感を発生させれば、メノウの精神にあるアカリの記憶を受け渡すことができる。自分の記憶を取り戻せば、アカリも意識を取り戻せるはずだった。

　楽観的だとうすうす察している自分の見苦しさを自覚しながら、メノウは進んだ。

『導力：接続──不正定着・純粋概念【時】──発動【断裂】』

　時間停止の効きが悪かったからだろう。アカリが指先から空間に作用する直接的な攻撃を放った。止まった時間の中を自由に動けないメノウに、回避は不可能だ。身をよじるのが精一杯だった。

　ハンマーでかれたような衝撃にのけぞる。直撃したのは肩。くしくも先日、大聖堂で戦った時、に傷つけられた場所と同じだ。ふさがりかけていた傷口が再び開いて、鮮血が飛び散った。

　無傷では済まなかった。だがいまアカリが放った魔導が本来の効果を発揮していれば、メノウの腕を切り飛ばしていたはずだ。

　となった彼女がメノウを相手に無意識に手加減している──などというロマンチックな理由ではない。やはり、【時】由来の魔導がメノウに対して効力を半減させている。

　それでも【停止】よりは効果がありと機械的な判断を下したのか、二発三発と撃ち放ってくる。

　腹、太もも、顔面、腕、。着弾するたびに、強い衝撃が走る。

　大丈夫だ。体を引きずる。痛いだけの攻撃など恐れるものか。肩から垂れた血が落ちる。問題ない。意識を失うほどの失血ではない。ならば体は動く。

　白い地面に、メノウの鮮血はよく目立った。足元に散った流血が靴底でこすれて赤い道ができる。ざりざりと粗い音を立てながら前に進み、自分に言い聞かせる。

　メノウとアカリは、つながっている。だから大丈夫。都合のいい言葉だけを選んで進む。

　手を伸ばせば届く距離に近づいた。

　いつもはくるくると表情が変わるくせに、いまのアカリは完全に無表情だ。ぱっちりした丸い目から正気が読み取れない。やわらかく愛嬌を振りまく全身に生気を感じない。人間としての感情がなくなっているのが見て取れる。いまのアカリは、大部屋に置かれている時計と変わりがなかった。

　メノウを見て、輝く笑顔を浮かべるアカリはそこにいない。

　アカリが笑わないものだから、メノウが無理やり笑顔を浮かべて笑いかける。

「バカね……あんたらしくも、ない……」

　バカねとメノウが言えばを膨らませてそんなことないもんとアカリが言い返す。何度も繰り返した旅で育んだ、いつもの二人のやり取りが、発生しない。

　それだけでメノウの言葉が届いていないことを、どうしようもなく実感してしまった。

　ぐっと唇をむ。

　わかっている。純粋概念を暴走させた人間が、呼びかけた言葉で戻るはずがない。家族だろうと、友人だろうと、恋人だろうと、どんなに近しい人々がいままでどれだけ声を枯らしたところで届かなかった。

　他の誰もができなかったことを、自分ならばと願うのは思い上がりだ。

　だから近づいて、抱きしめる。

　反応はない。となったアカリはなされるがままだ。腕を抱き返してくることもなく、だらんと両腕を垂らしたまま直立している。魔導を放つことすらやめている。

　状況は、なにも変わらない。

　当たり前だ。となった相手を、人が触れた体温で戻せるはずがない。感傷と感情で解決する問題ならば、処刑人が異世界人に標的を定めることなどなかった。メノウが異世界人を殺す理由にもならなかった。

「なんで、こんなことになっちゃったのかな……」

　アカリと旅をして、つらいことも多かったが、楽しいことがたくさんあった。

　アカリが繰り返してきた回帰の道のりを見て、彼女の思いの丈を受け取った。互いを知り合う導力接続で自分の大切なものを定めた。そうしていままでと決別するためにとの決闘に挑んだかと思えば、これだ。

　自分は望みをえることなどできないのではないか。

　すべてはメノウがしてきた罪の重さに天が与えた懲罰ではないのか。

　大切な友達のことを大切だと認めた瞬間に、最悪の形で失う。救いの糸を垂らしておきながら、奈落の谷底へと突き落とされる。お前はの民を殺し続けたのだから苦しむのがふさわしい運命だと道を敷かれている気すらした。

　わかる。いやというほどよくわかる。悪人は苦しむべきだ。報いを受けるのが正しい。メノウはいままでに殺してきた『迷い人』全員に一回ずつ殺されても償えない罪を背負っている。

　でも、だとしたら、だ。

「アカリを、巻き込むな……！」

　怒りが、声になって出た。ムカっ腹が立った。頭に血が上って歯をむき出しにする。

　人殺しで悪人のメノウがアカリを巻き込んだ？　なるほど、確かにその通り。ぐうの音も出ない。でも『善い人』であるアカリを巻き込む罰なんて、メノウは罰だと認めない、認めてたまるかと叫ぶ。

　友達なのだ。

　アカリがメノウのことを大切にしてくれた。メノウの価値を認めてくれた。メノウが大切にしてきたものは無駄ではなかったと受け止めてくれた。

　アカリが側にいるから、メノウはいつか死ぬためでなく、これから生きるための道を選べた。

『導力：接続── 』

　だからメノウは大切なすべてを取り戻すために、アカリと触れた全部から導力を通して自分が持つアカリの記憶を渡そうと試みて──

『筝?罩ｉ?絎???純粋概念【時】──』

　絶句した。

　そこに、アカリはいなかった。

　目の前にいて、確かに触れているのに、いまメノウが抱きしめているのはアカリではない。まるで星を飲み込む底なし沼だ。肉体も、精神も、魂も。生命の三要素すべてに純粋概念が広がっている。星々の散りばむ銀河よりも彼方に膨れる【力】の世界。メノウが導力接続で共有しようとした記憶が、いま発動している【世界停止】に片端から消費させられて飲み込まれる。

　経路からつながる【時】の概念が牙をむき、メノウの記憶すら脅かす。

「ッ！」

　意識が飲まれて消えそうになるのをこらえて、自分の肉体に引き戻すので精いっぱいだった。

　一歩、よろめいて後退する。

　ダメなのだろうか。

　メノウは、アカリの顔を直視できなかった。見ればなにも変わらない現実に打ちのめされる予感にうつむくことしかできなかった。

　頼みの綱が途絶えた。ぷつんと切れた希望の糸に突き落とされ、メノウの弱気が顔をのぞかせる。

　いまのアカリは世界の【時】として世界の時間軸に遍在してしまっている。そしてこの世界は、回帰を繰り返したことによって本来あるべき時間からずれているのだ。

　目の前にいるは、時間のを合わせるために世界の時を停止させて針を合わせようとしている。

　純粋概念という圧倒的な存在に飲まれてとなりながらも、メノウとアカリの導力接続は継続している。つまりそれは、星雲のごとく無限に広がる【時】の概念のどこかにアカリが漂っていることを示している。

　こんな近くにいるのにアカリの感情が伝わってこない。頼みの導力の相互接続も、近くにいるだけで【時】の純粋概念がメノウの精神にい寄るための経路にしかなっていない。もしこのまま、メノウまで純粋概念に飲み込まれたらどうなるのか。アカリから預かっている彼女の記憶まで削れてしまったら、メノウはアカリを元に戻す手段を失う。それどころかメノウの人格も消え去り、【時】の純粋概念に飲まれた肉体が二つになる。

　長針と短針がう。

　脈絡のない文章が頭に思い浮かんだ。前後がつながっていない言葉遊びが、なぜか真理を突いている気がした。

　手立てをなくしたメノウは、ふと、自分が来た道を振り返った。

　時間の止まった世界。真っ白な塩の大地で、メノウが歩いた道だけは、れ落ちた血で赤黒く染まっている。

　これがメノウの生きてきた道だ。赤黒い色に染まった自分の軌跡が、アカリと出会って行き止まっている。

　ここから先に、一歩も進めないのか。

　メノウは、夢を見た。

　アカリと一緒に生きていく夢だ。自分が生きている夢だ。導力の相互接続をしたメノウとアカリの間には秘密なんてない。相手が笑えば自分が嬉しく、自分が嬉しければ相手も嬉しい。メノウはアカリが繰り返した回帰の旅路を知っていて、アカリもメノウが生きてきた処刑人としての所業を知っている。

　だからこそ、お互いを認め合っている。

　アカリという友達となんでもない会話をして、一緒に生きていく道を選んだはずだった。

　誰かに聞かれたら笑われてしまいそうなほどバカらしく、恥ずかしくてアカリには言葉に出して伝えられなかった夢を、叶えたかった。

　一人じゃないって思えた時から、一緒に叶えられそうな気がしたのだ。

　二人でならって信じられた時に、不可能のすべてを吹き飛ばすような期待感がメノウの手を引いた。

　それでもやっぱり、人を殺した分際に、夢をかなえる権利なんて与えられないのかもしれない。

　どうにもできない。自分では、無理なのか。じゃあ、自分じゃなかったら。モモなら、サハラなら、アーシュナなら、マノンなら、あるいは──『』、なら。

「……ぁ」

　発想が、転換した。

　革新の手段がいた。解決の手立てが新星のごとくきらめいた。原色よりも色鮮やかに浮かび上がった答えに、メノウはした。

　手が、恐怖で震える。自分が思いついたことの罪深さに、背筋が凍り付く。

　自分は、そんなことをしないためにと戦ったのに。

　だが、いまをよぎった以外の発想はない。

「……ぁははっ」

　メノウはしながら、のろのろとへたり込んだ。

　ぺたりと地面にをつけて、幼子の仕草で指先を地面に埋めてほじくり返す。

　いま、メノウの足元にあるものを。かつては大陸だった大地が、どうして塩になったのか。無辺となった塩の大地は、なんのために隔離されていたのか。が条件起動をした時に脳裏によぎった要素が、メノウの頭の中で結びついた。

　こつん、指先に脆い塊の感触が当たった。存在した感触に、やはりと確信した。

　もう、これしか、ない。

　手の震えが収まる。

　決意が固まる。覚悟が決まった。目の前のアカリを見る。アカリらしさをすべて失っている。けれども彼女は間違いなくアカリを内包しているのだ。

「ね、アカリ」

　もしかしたら最期になるかもしれないと、万感胸に迫りながら語りかける。

「もし失敗したら……うん」

　メノウは導力接続によってアカリとの記憶を共有している。だからメノウ自身が体験しなかった出来事でも、アカリが経験した事柄を知っている。

　例えば、古都ガルムでの儀式場。

　メノウとアカリが引き離された後に発動した儀式魔導【漂白】の白濁液とアカリが放った【停止】の魔導は、拮抗した。

　純粋概念自体が禁忌のためにに発生することではないが、純粋概念同士の衝突は、お互いの魔導現象を対消滅させる結果を引き起こす。

「これでダメだったら、責任は、とるから」

　指先に触れたものを掘り出しながら、慎重に指で挟む。一滴で人を殺せる猛毒を扱うより神経を尖らせて取り扱う。

　違和感はあったのだ。戦う前に、がわざわざメノウの目の前で『塩の剣』を砕いたことに。あれは戦う前にメノウの心を揺らすためのパフォーマンスだと思っていたが、決してそれだけではなかった。

「だから、大丈夫よ」

　掘り当てたものを、メノウは慎重に、大胆に、畏れを込めて、遠慮なく。

　力いっぱいの全力で、引き抜いた。

　塩の大地がえぐれる。飛び散る塩に紛れて、小さなが現れる。

　白くて、い──『塩の剣』。

　この戦いの前に、メノウの眼前で『塩の剣』は確かに砕かれた。地面から出ている部分は叩き壊され、丹念に踏みにじられた。千年を通して守られた遺物が砕かれる様を、メノウは確かに目撃した。

　塩の大地に突き刺さり、地表に出ていた大部分は粉みじんとなって水に溶けた。

　言い換えれば、地中に刺さっていた切っ先は、刃の形を残しているということでもあった。

　メノウの手の中で、折れ砕けながらも残った剣の欠片はスムーズに動いた。中途半端に【停止】の効果に囚われているメノウよりもよほど軽やかだ。メノウが干渉しなくとも【時】を切り裂いて動く。どんな概念にだって対抗して切り裂ける。初めて手にしたが、この刃の効力には疑いを抱く余地がなかった。

　処刑人であるメノウは、時間回帰で不死身であったアカリを殺すためにこの刃を求めていた。

「大丈夫だから」

　あらゆる純粋概念を切り裂く刃を振りかぶり、メノウは宣誓する。

「なにがあっても」

　必滅の刃を殺すためではなく、どうにかしてアカリを生かすための一手として使う。

　それでもけであることには変わらない。

　この刃は、あまりにも強すぎる。

　少しでも扱いを誤って自分を傷つければ、メノウは絶対に助からない。それほどに危険な刃の切っ先を、初めての友達に向ける。

「誰がどうしても」

　もう迷いはない。だってとっくの昔に決めていたことだ。

　アカリとともに生きる決意は固めたけれども、アカリが世界を滅ぼすになるくらいなら──他の誰でもないメノウがとどめを刺す。

　メノウは彼女と一緒に生きる約束をしたのだ。

「これから、どんな『時』だって」

　だから万が一、その約束が果たせなかった時には一緒に死ぬくらいはしてやろう。

「私は、アカリの友達だから」

　万感の想いを込めて。

　メノウはアカリのに『塩の剣』の刃先を突き刺した。

　あ、ダメかも。

　最初の手応えに、諦観がメノウを襲った。

　塩の刃はあっさりと突き刺さってしまった。

　あてが外れたのか？　絶望に手を離しかけて、アカリの肉体に入った刃が止まる。



　時間の停止が、塩の刃を止めた。

　うまくいった。喜びかけて、愕然とする。

　アカリの胸元で塩化現象が始まった。あまりに強い効力に屈したかのように、アカリが膝を折ってうずくまる。

　やはり、無茶だったのか。

　顔面から血の気が引いた。しかし塩の進みは明らかに遅い。停止の影響を受けている。

　だが、止まらない。

　しゃがみ込んだ【時】のが、両手で刃を摑む。

　だが引き抜かない。塩化現象が始まったのだから、引き抜く意味がない。すでに塩となった部分から、指先ほどの範囲であれ、広がりつつある。

　見ていられない。ぎゅっと目をつぶる。

　見たくなかった。

　アカリが塩と変わってしまう瞬間など。

　見なければいけないと思った。

　自分がしでかした、アカリの最期を。

　目を、開けた。

　瞬間。

　世界が動きだした。

　アカリを中心にして世界に広がっていた時間停止が、の勢いで集束する。世界規模まで広がっていた概念的な【停止】が、ただ一点、アカリの胸元へ、ぎゅうっと凝縮される。

「……」

　メノウはを呑んで経過を観察する。

　アカリの胸元に、塩の刃先がほんの少し刺さっている。豊かな胸元が小指の先ほどの範囲だけ塩となり、崩れた布地からわずかに地肌がのぞいている。だが傷口から容赦なく始まるはずの塩の浸食は止まったままだ。

　塩化現象と時間停止。二つの概念がせめぎ合っている。【時】のが世界に広げていた魔導現象を集中させることで身を守っている。

　賭けに勝った。メノウはの息を吐く。

　やったのだ。

　メノウが塩の刃を突き刺したことで引き起こされたのは、としての防衛反応だ。

　まだアカリの意識が戻ったわけではない。としての【力】をすべて防御に使うことを強いられているのだ。彼女は世界全部を止めていた【停止】を自分の体に注ぎ込むことで塩になる現象に抗っている。同じく『塩の剣』の刀身も時間停止に巻き込まれて完全に固定されているため、刃先がわずかにアカリに埋まったまま、ぴくりとも動かせない。

　もし『塩の剣』が完全な形として突き刺されば、【時】であろうとも容赦なく切り裂き、塩に変えたのかもしれない。

　だが幸か不幸か、『塩の剣』は砕かれて刀身は欠片ほどしか残っていなかった。

　大きさが減った分、効力も低減した。

　結果として、【時】のと『塩の剣』は、お互いの魔導現象が完全に釣り合って拮抗することとなった。

　かちゃり、と金属音がした。

　メノウは慌ててそちらを向いた。

　あるまじきことに、アカリに神経を集中させて周囲の警戒を怠っていた。短剣がこすれる音を立てたのは『』だ。時間が止まっていた彼女からすれば、メノウがアカリの胸に塩の刃を突き刺すまでの過程が完全に抜け落ちて見えるはずだ。

　いまの状況だけで止まった世界の中でなにが起こったのかを悟ったが、眼球がこぼれんばかりに目を見開く。

　そこまで驚くことなのか。普通の人間ならともかく、ならばあっさりと現実を認識して処理するだけだとばかり思っていた。メノウは初めて見たかもしれないのに不審を覚える。

　だがのんびりしている時間はない。【時】のを止めたからには、をどうにかしなくてはならない。メノウがアカリを救出するのを黙って見過ごしてくれるほど親切ではないことくらい知っている。

　なにより、いまならを突けそうだ。

　との戦闘の再開だと短剣を構えようとした時だ。

「こんにちは」

　そこに人がいると、声を掛けられるまで認識できなかった。

　耳元でささやかれた声に、驚きのあまり短剣を取り落としかけた。

　白い──どこまでも白い少女だ。外見が白いわけではないというのにこの世界の背景に溶け込んでしまっているほどに白く、色を乗せればさぞかし映えるだろうという感想を抱いた。

　不思議な印象を抱いてから、相手の顔を認識する。

　自分の顔があった。

　伸びきった髪が顔の半分を覆っているが、顔立ちがメノウとそっくりだ。しかし二人の最大の違いは髪の色にある。

　真っ白な印象を人に与える彼女の髪との色は、黒だった。

「だ、れ……？」

「ボク？」

　にを締め付けられながらも振り絞った問いに、あっさりと答えが返される。

「ボクは君たちが『主』と呼ぶ存在だ。世界の守護者にされた【白】だ」

　長く伸びた黒髪は、柳の下にたたずむ幽霊を思わせる。だが、どこか懐かしい既視感を抱いたのは、メノウが幼いころにと初めて出会った状況とよく似ているからだった。

　自分がいて、がいて、真っ白な印象を持つ女性がいる。

　日の下にいて、足のある亡霊は淡々と告げる。

「ボクは高校一年三組、」

　それは、アカリと出会ったときに聞いた学校とクラスだった。

「ちゃんの、親友だよ」

　傷だらけのメノウに、真っ白な黒幕の正体が告げられた。

　西彫学園高校、一年三組。

　相手が告げた名称には聞き覚えがあった。グリザリカの王城に潜入してアカリと出会ったときに、メノウの質問に彼女はこう答えた。



　──ひゃい!?　西彫学園高校の一年三組、灯里です！

　自分と同じ顔をした人物が着ている服にも見覚えがある。胸元の赤いタイ着用の有無はあれど、アカリと出会ったときに着ていたセーラー服とデザインが一致する。

「ありがとう、『』」

　メノウからへと視線を移す。地面に引きずらんばかりに伸びきった髪が、ゆらりと不気味に彼女の動きに追随した。

「二十年前に君がボクにたどり着いたのは、だった。君の協力がなければ、ここまでうまくはいかなかったよ」

「そうか」

　どこかうわの空のが言葉を返す。

　やはりの様子が変だ。先ほどまでの時間を稼ぐ戦いぶりから、目の前の人物との合流を待っていたのはわかる。逆転のための布石が機能したというのに、の態度はどこか虚脱的だ。

　しかし新たに現れた人物がの態度を不審に思うことはなかった。

「あとはボクがやるよ。君に任せてアレをうっかり殺されでもしたら、目も当てられない」

『導力：接続──完全定着・純粋概念【白】──発動【白霧】』

　メノウの鼻先に、霧が発生した。

　魔導発動とメノウが飛びのいたのとは、ほぼ同時だった。直前に動いていなければ、全身が霧に包まれていた。

　魔導の気配に覚えがある。これは、の体から湧き出していたものと同質だ。囲まれたら抗えない。

　その魔導だけで、目の前の人物が誰なのかをメノウは悟った。

「あなた、【白】の勇者!?」

「……ずいぶんと懐かしい呼び名だね」

　霧の魔導は、メノウを捕らえ損ねたのを見るや、すぐに形を変化させた。薄く広がっていた霧が固まり、いくつかの小さい塊になる。

　ふわりと浮いた白霧が襲い掛かってくる。

　メノウは反射的に短剣を振るう。

　当たった。だが手ごたえがない。抵抗なく切り裂けるが、白い霧の塊はすぐに再生して形を取り戻す。体に直撃した場合にどうなるかは、試す気にもならない。

　物理攻撃の無駄を悟ったメノウは教典魔導を構築する。

『導力：接続──教典・三章一節──発動【襲い来る敵対者は聞いた、鳴り響く鐘の音を】』

　教典から立ち上る導力光が教会の鐘を形成した。左右に振られた導力の鐘から発生した音響攻撃に、宙に浮かんでいた霧が散らされる。

「ああ……手加減、しすぎたかな、うん」

「なんで──」

「ボクが君と同じ顔をしているかって？　勘違いしないでね。君が、ボクと同じ顔をしているんだ」

　どういうことだと、相手の説明を聞きながらも注意深く観察する。

『』を閉じ込めていた霧の結界と同質の魔導を行使したことから、目の前の人物が【白】であることは確かだ。千年前からにもならずに生き続けているというのは信じがたいが、それ以上に疑問なのが相手の容貌だ。

　やはり、自分とよく似ている。

　鏡合わせとは言わない。相違点はいくつもある。髪の色と長さ。瞳の色も違う。よくよく観察すれば、年齢も相手のほうがメノウより少し年上だ。

「君はボクの『目』だよ」

「……目？」

「そう。通信魔導を備えている教典を持っていれば、君の周囲の状況は『星の記憶』にされる。教典を持って灯里ちゃんと一緒にいるだけで、君は『目』としての役割を果たしてくれた」

　少しずつ、理解が深まる。

　と関わる存在と戦った時、『』の小指も『絡繰り世』の意図が乗った三原色の魔導兵も、メノウに対して共通の単語を吐いた。

　── ちょっぴり【白】の気配がするわね。

　── なぜ【白】が、ここにいる？

　いままで、メノウにはなんのことか知るはなかった。

　その答えを持つ女が、おもむろに問いかける。

「君は日本に戻るために必要なものは、なんだか知っている？」

　知っている。アカリは日本に帰るのに必要な代償を聞いて、に心を折られた。

　億人単位にのぼる、大国の国土にする量の素材、海を干からびさせかねない膨大な導力。

　これら三つの要素を大量に消費する必要がある大規模魔導儀式が、日本への送還魔導だ。それこそ、一度の発動で人類の存続が危ぶまれるほどの犠牲を強いている。

「古代文明期。千年前のこの世界は純粋概念を活用して大いに発展していた。宇宙の膨張よりも早く発展しようと加速度的に技術競争を始めた結果、一部の研究者の頭から、人倫が消えた」

　は口を挟んでくる気配もない。メノウの処断をハクアに任せている形だ。

「殺されたほうがマシだと思える研究が、行われた時代だ」

　栄華とされる時代の闇を語る。

「その時代にあって、日本人を消費し続けたこの世界に清算を突きつけてやると決めたのが、ボクと、他の四人だった。ボクらはそれぞれ、召喚されてから魔導研究所に囚われていた人間でね。自分たちも被害者だったからこそ、あまりにも非人道的な実験をしている機関から被害者を助け出すなんてことをしていた」

　一度、聞いた話だ。内容は途切れ途切れで思わせぶりながらもリベールの町でが語っていた内容と合致する。

　彼らは五人で世界と戦ったと。

「ボクたちの活動の結果として生まれた送還陣にも問題があった。一回の起動につき、たったの一人しか戻れなかったんだ。より深刻なのはね、この世界では一回分の起動しかできないんだ。物理的に、この世界には一回の送還分しか素材が存在しない。日本帰還のための魔導陣の使用権を争うことで、ボクたちは分裂した。ボクたち五人は、それぞれが絶対に帰還したい事情を抱えていたから」

　じりじりとメノウは後ずさる。なんの警戒もなしに、ハクアが間合いを詰めてくる。訓練の心得が見られない素人同然の歩きだというのに、不気味な迫力がある。

「そして、ボクが勝った。そのまま千年前に帰ればよかった。帰れれば、本当にそれでよかった。けどね。さっき言っただろう？　ボクは灯里ちゃんの親友なんだ」

　ハクアは静かに語る。自分の勝利を語りながら感情が声に乗っていない。

「灯里ちゃんが未来にこの世界に来ると、【星】が未来を読んだ」

　四大の一角。『星骸』のもととなった純粋概念【星】は、能力の一つに【占星】があった。対象の人物にとって重要な未来を読み解き、伝える能力だ。

「こちらの世界から日本につながった時間軸は一か所だけだから、召喚される日本人はほとんど同じ時代を生きた人間だ。千年前の召喚も、いまの召喚も、こちらに来る日本人の時代は変わらない。召喚できる時間軸が局地的だから、ごくまれに知り合いや血縁が偶然召喚されることもある。……わかるかい？　その瞬間、ボクは元の世界に帰る意味を失ったんだ」

　四大を討滅し、元の世界に帰る権利を手に入れた彼女は、死にぞこないの占星術に囚われた。

「だから、待った」

　そっけなく告げた声は、虚無をはらんでいた。

　この世界に親友が──時任灯里が召喚されると知った時に、彼女は待つと決めたのだ。

「待って、計画を練り上げた。ボクが灯里ちゃんと一緒に帰るために、世界を牛耳った。送還陣のおひとりさま問題も解決したよ。魔導的に同一人物になれば、素材と生贄のかさましは必要だけど、一緒に帰れるんだ」

　彼女の言葉に、思い当たることがあった。

　導力の相互接続。メノウとアカリは導力を通じて心を合わせ、魂の共感を果たした。導力の交感がある状態は、魔導的に見れば同一人物であるともいえる。

「まさか……」

「そのまさかだよ」

　アカリとメノウが導力の相互接続をできるようになるまで、時間を繰り返させていた。

　メノウを素材として完成させるために。

「ボク自身はね、こんななりをしているけれども日本人だ。魂に純粋概念があるせいで、どうしたって灯里ちゃんと魔導的に同一になることはできない。純粋概念は、互いに食い合うからね。だからいまこの時代に、ボクと同じでありながら違う存在をつくる必要があった」

　ハクアが、まっすぐメノウを見つめる。

「『目』以外の役目である『脳』はそこだよ。君はボクだ。『私』だった頃のボクの性質なら灯里ちゃんとの相性がいいに決まっている。あとは君をボクと同調させればいい。ボクの目となり脳となり、よく役割をこなしてくれた。とはいえ……」

　ちらりとアカリに視線を向ける。胸元に刃先が刺さったまま停止している彼女は、彫像のようだ。

「これは、予定になかった」

　メノウが世界の時間停止を解除したのは、ハクアの計画から逸脱したものらしい。

「時間が止まっているうちに、『』も『絡繰り世』も処理して日本帰還の準備は全部済ませようと思っていたのに……まあ、いいか。灯里ちゃんの助け方は、おいおい考えるとして、まずは君だ」

　ハクアが事情を語り聞かせていたのも、まったくの無意味ではない。知識を共有することで、少しでも同一性を高めていたのだ。

　やはり、こいつは敵だ。こいつこそが、メノウの敵だった。

　メノウの敵意に、ハクアが肩をすくめる。

「余計な手間は、かけさないでおくれよ」

『導力：接続──』

　メノウの呼吸が、止まった。

　先ほどの魔導とは、込められている導力の量も、質も、わけが違った。

『完全定着・純粋概念【白】──』

　自分が後ずさっていることに、が塩を引きずる音で気がついた。

　見せつけるような、ゆっくりとした魔導構築。がれる魔導の不気味さでも、巧みさでもなく、恐怖を催すのは、ただ莫大な導力を集めて、集めて、集めて、押し固めた導力。

　固めたはずの自分の覚悟など、紙切れだった。

　そう思わずにはいられない。

　見ただけで、あらゆる心を恐怖へとさせる ──【力】。

『発動【混沌】』

　ハクアの手のひらが、こちらに向いた。

　けた。

　全力で、他に無駄の思考もせずに、なりふり構わず駆けだした。

　直前までメノウがいた空間が白く染まった。ハクアの腕を向ける延長線上のすべてが白く塗りつぶされる。世界が上書きされてリセット状態になる。どうなっているのかは、まったくわからない。ただそこに、【白】の導力以外のものが存在しなくなっているのだけはわかる。

　こんな魔導を放たれては、距離の意味がない。ならば、近づいて──どうする？

　無防備な魔導構築中にすら、えて後退した自分になにができる？

　ついっとハクアの腕が動く。

　なぞる空間が白一色に変わっていく。子供がペンキで世界を塗りたくるような雑さで、三次元がことごとく白く変わる。あと少し追えば、逃れようもなくメノウが塗りつぶされて終わる、というところで魔導が中断された。

「抵抗が無駄だって、わかってくれたかな？」

　いまの一瞬でごっそりと気力を使って肩で息をしたメノウに、ハクアがむ。

　脅しだったのだ。ただ脅しを効かせるためだけに、あんな魔導を打ち放った。

　消耗し、足を止めたところに狙いをすまして本命の魔導が放たれた。

『導力：接続──完全定着・純粋概念【白】──発動【憑依】』

　メノウの精神が、大海に叩き込まれた。

　自分の精神をメノウの体に移す、【憑依】。

　他人の精神が丸ごと入り込んでくる感覚を味わうのは二度目だ。

　大陸中央部にある砂漠での戦闘の最後、三原色の魔導兵がメノウに行使した魔導。本来ならば『絡繰り世』である【器】の概念魔導だ。あの時だってメノウの抵抗は無駄だった。敵の強大さに蹂躙された。

　だがいまメノウがさらされているのは、他と比肩のしようがない現象だ。

　海に一滴の水滴を落としてからその水滴を見つけろと言われても、誰にだってそんなことはできないだろう。そしていまのメノウは、海に落とされた水滴だった。

　自分が拡散しないように、混ざり合うことがないようにと自我を固めることしかできない。それでも、徐々に端からゆっくりと広がっていくことを防ぎきれない。メノウは抵抗できない。ハクアの言葉を信じるならば、メノウは魔導的に精神面での抵抗ができないように調整されてつくられた。

　いま、この時のために。

　そうか。こいつか。こいつが、自分の中にいたのか。

　メノウは自分の正体を知る。自分のルーツを学ぶ。そのうえで、はっきりと断言できる。

　こいつになることが、メノウの生きてきた意味ではない。

【憑依】に抵抗するのは、自分だけでは無理だった。

　だから、自分以外に手を伸ばす。いまメノウの中にある、自分以外。導力接続でつながるアカリの魂から純粋概念を浸食させる。

　ハクアは肉体の同一性を利用して、メノウへと精神を移植しようとしている。ならばハクアをくため、【時】のを利用する。すでにメノウの肉体には、純粋概念の性質が染み込んでいる。

　純粋概念は、互いが食い合う。

　いまここで、メノウは自分の肉体の特性を塗り替える。ハクアの似姿として造られたメノウの肉体が白の純粋性を失う。いままでのように抵抗なく導力接続をすることは、二度とできなくなるだろう。それでもかまわない。

　ハクアは、メノウのことを自分の『目』であり『脳』であると言った。

　ならばメノウは、自分の中にある【白】の要素を、【時】の純粋概念と食い合わせる。自分の中にあるハクアなど必要なはずもない。

　アカリとは、つながっているのだから。

　メノウの魂を通じて流入する【時】に、ハクアが目元を厳しいものにした。

　ハクアとメノウの同一性が一つ、失われていた。

　メノウに同調しかけていた【力】が、反発を起こした。メノウとハクアの肉体が、別物になる。当然の拒絶反応が二人の精神を反発させ、【憑依】の魔導を失敗に終わらせる。

「残念だったわね……！」

　不敵に笑ったメノウは無意識に止めていた呼吸を再開する。息継ぎをする要領で空気をむさぼる。

「……うん、すごいね」

　ハクアが本気で感心した声で言った。

「【憑依】を耐えぬくなんて、すごいすごい。君が一生懸命鍛え上げた技術は、少なく見積もってもボクの魔導一発分以上の価値があるみたいだ。それって、本当になかなかすごいことだよ？」

　後ろに手を回したまま、メノウに歩み寄る。何気ない歩調なのに、メノウは潰されそうなほどの圧迫感に襲われていた。

「手を抜こうとして、悪かったよ。ごめんね。謝る」

　にこにこと微笑むハクアの背後に、いくつもの魔導構成が見えた。

　純粋概念の行使者らしく、思考が魔導構成となって編まれている。並行して編まれ、放棄され、また次、どうしようかという思考がだだれになって魔導として構築され続けては破棄される。

　そのどれもが、メノウがいままで見たことのある純粋概念由来の魔導に劣らない。なにより驚くべきは、構成される概念の種類の多さだ。【白】の概念でありながら【器】の概念魔導を使った時点で気がつくべきだった。

「これから君の意識は消えるけど、言い残すことはあるかい？」

　信じがたい。

　一人の人間に、複数の純粋概念が詰め込まれている。

　最初にハクアが放った魔導は、複数の純粋概念をねて放ったことで発生した、わけのわからないなにかだったのだ。

「ああ、千年前にこの世界に召喚された『私』だった頃のボクがどんな実験を受けたか、言ってなかったかな」

　メノウの驚きに、親切にも注釈を入れる。

「【力】が食い合うことなく、ひとりの人間にどれだけ純粋概念が詰め込めるか、だよ」

　そうして選ばれた純粋概念が【白】だった。

「純粋概念は暴走すると魔導として世界に遍在する。純粋概念【白】を持つボクはね、遍在した魔導を書き込むのに、とてつもなく都合のいい適性を持っていたんだ。普通、世界に遍在した魔導は元の純粋概念から大きく効果を落とすけど、ボクの中に詰め込んだ純粋概念は、ほぼ、その効力を弱めなかった」

　そうして生まれたのが、あまたの純粋概念を操る異世界人。古代文明期にこの世界に反旗をした『白の勇者』と呼ばれる革命者であり、後の世で『主』を名乗った支配者だ。

　ダメだ。可能性が見えない。メノウは対抗するという選択肢を捨てた。

『導力：接続──短剣・紋章──発動【疾風】』

　地面がするかのように吹き飛ばされる。

　短剣を地面に突き刺して【疾風】を放つことで起こした即興の煙幕だ。視線をる目くらましにれて、メノウは導力迷彩で景色に同化する。

「うん？」

　ハクアが首を傾げる。

　メノウがなにをしたいのかわからなかったようだ。自分の視界から姿が消えてから、メノウの行動がに落ちたと手を打つ。

「ああ、逃げるんだ」

　逃げようとするメノウの背中へと投げかける声には、あからさまなりがあった。

　笑われようとも足をめるはずもない。なにを言われようとも逃げればいい。ハクアがアカリの命を脅かすはずがないことはよくわかった。ならばしいが、ここは一度撤退して、アカリを助ける方策を練り直したほうがいい。

「いいよ、逃げても。大サービスだ。追わないでおいてあげる」

　逃走を選んだメノウの背中に、次の声がかけられる。

　それがか本当か。メノウでは判断できない。油断させるブラフかもしれない。もしかしたら単純に面倒になったのかもしれない。次の瞬間には気が変わって、背後から魔導を乱射してくるかもしれない。

　それでも正面から立ち向かうという選択肢はあり得ない。絶対に敵わないと思い知らされている。

「だって──」

　なにが目的か。法外なほど有利な条件を告げたハクアが言葉をつなげる。

「──でも灯里ちゃんを見捨てる程度の『私』なんて、いらないから」

　メノウの足が、鈍った。

「白々しいほどに薄情だけど、いいんじゃないかな。自分が空っぽの紛い物だって白状している行動だ。友情よりも自分の命が惜しいんでしょ？　……ああ、でも、そうだな。一つ、教えておいてあげる」

　ハクアは、その場から動かない。宣言通り、追い打ちをする気配などもない。

　だというのに逃げ出していたメノウの足が躊躇する。歩幅が狭くなって、地面をる力が減少する。

「君と灯里ちゃんとの記憶を消したのは、ボクだよ」

　メノウの導力迷彩が途絶えた。

　ハクアが姿を露わにしたメノウを目で捉える。まだメノウは逃げきれていなかった。多少の距離はあるが、ハクアの魔導の範囲内だ。

「ほら、どうしたのさ。追わないって言ってるじゃん」

　約束通り、追撃の気配は一切無い。ハクアは煙幕を立てた位置から一歩も動いていない。

　逃げればいい。どれだけ考えたところで、ここで戦う意味などない。勝算も、活路もない。勝てないのだ。

　だが。

　メノウは立ち止まって問いかけていた。

「なんで、消したの？」

　メノウにとって、アカリと共有したもっとも大切なもの。

　二人の思い出の片割れを。

　こいつは、消したのか。

「だって、いらないでしょ？」

　どこかに表情を落とした顔のメノウに、ハクアが答えた。

　ハクアがセーラー服のスカートのポケットに手を入れる。取り出したのは、白いカチューシャだ。

「ボクは灯里ちゃんと日本に帰る。ボクの中には、灯里ちゃんとの日本での記憶が、ちゃんとあるからね。灯里ちゃんとつながる魔導素材である君の肉体さえあれば、日本での灯里ちゃんの記憶は元通りになる。この世界で過ごした君との記憶なんていらないよ。言っておくけど、ボクだって日本に帰る時、こんな世界のことは全部【漂白】して忘れて、ただの『私』だった頃に戻るから」

　だから消した。

　この世界にいたアカリを消してにした。

　アカリを灯里にするために。

「ボクたちにはいらないんだよ。この世界のことは、全部」

『導力：接続── 完全定着・純粋概念【白】── 発動【風化】』

　世界のどこかで暴走した純粋概念は、ハクアの力となる。そのことを証明するように、彼女は【時】の魔導でカチューシャを風化させた。

　ハクアの手元でカチューシャが塵となって風に流れる。

　メノウが、ねだるアカリの要望に応えて花飾りを付けた思い出の品が。

「日本に帰って、ボクたちは『私』と『灯里』の生活を取り戻す」

　そのためだけに、アカリの中からメノウのすべてを消し去った。

「そう」

　納得した。

　よくわかった。

　ふらり、と足が前に出た。意識はしていなかった。けれども自分の体は、よくよくメノウの願望を汲んで動いた。

　純粋概念【白】は、黒髪を風にそよがせて、メノウをせせら笑う。

「逃げないんだ」

　やめろ。心で生まれた制止の声を無視した。向かえば死ぬとわかっていた。死ねばアカリを残すことになる。モモにお別れも言えない。なにも残らない。覚悟を決めて挑んだとの決着すらなく、いきなり横入りしてきたコイツに殺されて終わる。

　それでも止まれない。

　たぶん、初めてだ。

　誰かに、純粋な殺意を覚えたのは。

「死ね」

　散々、人を殺して、いままで口に出した覚えのない悪意が一塊の氷のような手触りで放たれる。腕を振り、足を踏み出す。死地に向けて全力で駆けだした。

　勝てない。死ぬ。それがわかって、メノウはまっすぐ突っ込んだ。

　ハクアは笑った。

　無手のがら空きになった胴体。あからさまな誘いだ。

　受けて立った。

　他人でありながら、これほど自己嫌悪をぶつけるにふさわしい相手はいない。メノウは限界まで自分の身体能力を引き上げる。イメージは、自分なんかを慕ってくれる後輩のモモだ。彼女の導力強化をトレースするように、肉体をほとんど暴走させる勢いで踏み込んだ。

　まっすぐにハクアをにらみつけたからこそ、その後ろにいる人物をメノウは捉えることができた。

　メノウは後ろの光景に目を奪われた。

　ハクアの後ろにはがいた。彼女はハクアとメノウのやり取りに目もくれていなかった。アカリから塩の刃を抜こうと、あるいはへし折ってやろうとしていたがたし気に地面を蹴り上げる。珍しくも感情をあらわにしたは、深々と息を吐き、自分の短剣を抜いた。

　メノウが突っ込むのに合わせて、当たり前の足取りで後ろからハクアに近づき、

「は？」

　背後からハクアの心臓に、短剣を突き刺した。

　衝撃に、世界が動きを止める。



　少し前に世界を巻き込んだ概念的な停止でない。信じられないことが起こったのを目の当たりにした人間を示しての比喩表現だ。

　それほどに、衝撃的だった。

　メノウはの突然の凶行に精神的な衝撃を。ハクアは純粋に急所を貫かれた肉体的な衝撃だ。

　なにが起こったのか、まるでわからないという白紙の表情でハクアが振り返る。

　心臓を貫かれているのに動けているのは、さすが千年生き延びた存在であると称賛するべきか。が短剣を引き抜くと、何事もなかったかのように肉体が元に戻る。ハクアの肉体再生の原理が、細胞単位で行われている肉体の生贄と召喚を利用した古代文明期の技術の産物だとまでは、メノウにはわからない。

　だが、は知っていた。

　『』はここ十年以上、ハクアにとって忠実なの一つだった。事情を知りながらも、腐ることもちることもなく、淡々と役目をこなした。

　信頼はしていない。

　だが信用はしていた。

「なんで？」

　ハクアの声は、メノウが聞いた彼女の言葉の中で、もっとも純粋な問いだった。

　は大口を開けて笑い飛ばした。

「昔に殺した友人から、お前を殺してくれと頼まれていてな」

　言い放ってから、口元をひん曲げる。

「私がお前を殺す理由に、それ以上が必要か？」

　ハクアの目が針のように細められた。

　心臓を貫かれた後遺症は一切ない。後遺症どころか、血の一滴もしたたり落ちていない。

　かつての古代文明期、シラカミ・ハクアは数多の純粋概念を束ねるとして、まず四つの不死の要素を詰め込まれた。生命の三要素、一つでも不滅になれば不死となる技術を三つとも注ぎ込まれ、【力】の完全性を人体で表現することで生命の三要素が消えてすら滅することはできなくなった。

　古代文明期崩壊から千年。いくつもの純粋概念を注ぎ込まれた彼女は、通常の手段では決して死なない。

「なにがしたいか知らないけど、不意打ちくらいじゃボクには無意味だ」

「だろうな。お前の強さは他でもない【白】という概念の純粋性にある。ただでさえ【白】の魔導は強かったが、四大の概念を飲みこんで自分のものとしたことで飛躍的に能力が増した」

　自分の攻撃の無意味さに落胆するでもなく、ふさがった傷口をする。

「記憶の漂白という、他の異世界人に対する絶対的なアドバンテージと、暴走によって世界に偏在した純粋概念を自分の魂に刻んでものにできるという特異性こそが【白】の強みだ。お前はこの千年で、どれだけの概念を飲み込んだ？　なにがこの世界が日本人を消費している、だ。他でもないお前が好き勝手をした世界の現状が、いまだろうに」

「なんだよ」

　ハクアの声が怒りで震えた。怒りのまま、彼女の背後に魔導構成が浮かび上がる。

　援護を。

　メノウは、とっさに思う。

　相手は世界の頂点にいる『主』だ。いくらでも勝負になるはずがない。

　だからほとんど無意識で、メノウはの横に並ぶ。

「どいつも、こいつも、なんなんだよ」

　ハクアの能力が空間を満たし始める。複数の概念が魔導構成となってずらりと並ぶ。

　ハクアが打ち放とうとしているのは、最初にメノウに披露したものと同じだ。

　あれは、まずい。魔導というものを理解しているからこそ、脅威がわかる。逃げなければ。少なくとも、ハクアを止めなくては。生きるために足を動かそうとして、首が絞まる。

『導力：接続──完全定着・純粋概念【白】──発動【混沌】』

　がメノウの黄色いフードをんでいた。

「え？」

　ハクアとメノウの声が重なった。

　は二人の反応など気にも留めない。それが唯一の正解だといわんばかりの迷いのなさでメノウを引き寄せ、盾にした。

　うわ、死んだ。

　恐怖を感じるよりも先に、みたいに単純な思考が文字となって浮かんだ。まさかこのタイミングで肉壁にされるとはとも考えていなかった。メノウは思考が停止した間抜け面のまま身動きすらとれない。

　だが予想外だったのはハクアも同じだ。

「このっ……！」

　彼女の声には焦りが含まれていた。そのまま腕を数センチ動かせば、メノウごとを真っ白に塗りつぶせる軌跡。

　ハクアは必死ので魔導をらした。

　いまもなお、メノウとアカリの魂は導力でつながっているのである。ハクアはメノウの肉体を必要としている。繰り返される時間回帰の間も待ち続け、ようやくアカリとの導力接続を可能としたのだ。

　時間をかけることでしか、メノウという魔導素材は作れない。

　『』を殺害することより、メノウの確保は優先される。

　魔導を中断したハクアは隙だらけだった。無防備だ。いくらでも攻撃できる。だがいまと同じ状態の時ですら、メノウはハクアに攻撃を仕掛けることができなかった。

　当然、は攻撃した。

「ぶっ!?」

　悲鳴が上がる。

　がメノウをぶん投げたのだ。なるほど、殺せないメノウを武器にすれば、迂闊に魔導で迎撃することもできない。ハクアと衝突して折り重なる。メノウは抵抗する気力も起きなかった。ただでさえ、肩からの出血がある。肉体と精神の疲労感がひどい。

「なにを──び!?」

　声を上げたハクアの顔面を、が蹴り抜いた。鼻先にブーツのつま先がかすったメノウは、反射的に身をすくめる。

「笑えるなぁ」

　魔導も導力もない、純然たる肉体的な暴力。と光を放つがハクアを見据える。

「導力文明の最盛期が産んだ超人が、あまたの純粋概念を取り込んで神様面した異世界人が、千年で混濁した自分に絶望していた人間が、このざまか」

　くはっと大口を開けて笑う。

「だ」

　挑発だ。メノウにはわかった。明らかに攻撃を誘っている。

　ハクアには、わからなかった。

　痛みに涙をにじませて、をにらむ。

　メノウを殺してはいけないという縛りはあれど、数えきれないほどの純粋概念を身に宿す彼女の強さに疑いはない。手段はいくらでもあるのだ。

『導力：接続──完全定着・純粋概念【白】──発動【無】』

　この千年で蒐集した自分が抱える純粋概念の一つ【無】を解き放ったハクアの魔導が、導師の右足の付け根に当たった。

　太ももが、半ばから消えた。

　の体が、ぐらりと傾く。ハクアがざまみろとに口元をゆがめる。

　ちぎれたの右足が肉々しい音を立てて地面に倒れ──ることは、なかった。

『導力：生贄供犠──右足・原罪ヶ印憤怒──召喚【怒濤】』

　の右足が、生贄にささげられた。

　人間の肉体の一部を対価に召喚されたいが、赤い粘体となってハクアにへばりついた。

　処刑人でありながら、禁忌である原罪魔導を行使したにハクアがとする。

「君は──むが!?」

　開いた口から、赤い呪いが入り込もうとする。ハクアの能力を考えれば人体の右足一本の対価で召喚された呪いが効力を発揮するとは思えないが、たぶん、純粋に気持ち悪いのだろう。とっさに口を閉じて顔をそむけた。

　ハクアが呪いにかかずらっている間に、はためらうことなく自分の足の切断面に短剣を向けて紋章起動。

『導力：接続──短剣・紋章──発動【導枝：寄生鷲の種】』

　導力の種を、自分の傷口に撃ち込んだ。右足の切断面に根付いた導力が芽吹き、みった導力の枝が即席の義足をつくっての体を支えた。

　止血の応急処置と義足の作成を同時、かつ即座に行った。メノウも体験したことがあるからわかるが、壮絶な痛みに襲われているはずだ。自分の肉体で急速に植物が成長しているような状況なのだ。間違いなく、右足が吹き飛ぶよりも痛覚を刺激している。

　だがは顔色をピクリともゆがめない。

　ハクアがメノウを押しのけて立ち上がった。技術はつたないが、さすがに導力強化のレベルはメノウと比べ物にならない。

　だがのほうが早かった。彼女は口を開き、教典に話しかけた。

「おい、ポンコツ」

『マスター。ご命令でしょうか？』

　返事があった。

　応答した存在に、は一声。

「お前の記憶をすべて使って本体につなげろ、ポンコツ。座標はここだ」

　それは犠牲を強要する指令だった。

　拒否はなかった。『』の教典に宿った名もなき導力生命体はよどみなく返答する。

『かしこまりました、マスター。ですが私が消えて寂しくはないでしょうか』

「とっとと消えろ。あいつの残骸が宿った端末に人格が生まれたのが間違いだ」

『ならば消し去ればよかったのです。あなたにも感傷がある証拠でしょう。あ、反論を聞く気はないので、私はマザーの元に還ります。楽しかったですよ、マスター』

　了承と同時に、教典がひときわ大きく輝いた。

『導力：接続── 模倣回路・純粋概念【光】── 発動【光信】』

　莫大な【力】がし、一本の細い光線となって天へと放たれた。

　その瞬間だけは、ハクアもメノウも同じ姿勢で空を見上げていた。

　なにが起こったのか、わからなかった。

　魔導が発動したというのに、なにも起こらなかったからだ。莫大な導力の行き先がメノウの感知できる範囲を遥かに超えていた。

　だがハクアにはわかったらしい。彼女は声を荒らげる。

「あれは、まさかマルタの……！　『』!?　君、死ぬ気か！」

「まさか。私は聖地に戻るよ。お前らと違って、守るものなどないからな」

　の手から教典が、消えていく。端から塵となって崩れ落ちる。

　は転移の門に向かって、すたすたと歩みを進める。立ち去ろうとしている。なぜ、とメノウは困惑する。ハクアへの裏切りを表明しながら、あっさりと帰ろうとする意図が読めない。なにもしないのなら、ここで裏切りを宣言する必要自体がなかったのだ。

「逃がすと思ってるのかよ」

「逃がすと思っているとも」

　凄むハクアに恐れる気配もなく、肉体を【停止】させているアカリを指さす。

「ソレ。肉体が【停止】しているから死ぬことはないが、海に落ちたら、まず見つからないぞ」

　ハクアが顔色を失った。

　メノウは疑問が増えた。『海に落ちたら』という仮定が話に浮かぶのかがわからない。狭い島だ。歩けば海に行き当たるのも早いだろうが、すぐそこに海岸線があるというわけでもない。ここにいるアカリが海に落ちるというイメージが湧かない。

「大変だな、守る者がある奴は」

　言い放って、は悠然と立ち去った。

　『』は片足が即興の義足と思えない足取りで塩の大地を進んでいた。

　彼女が教典を端末に使った通信起動から発射、そして着弾するまであと一分もない。時間を無駄にすれば、自分が発動させた攻撃に巻き込まれて死ぬ。

　慌てることなく、それでも確実に歩いたがちょうど転移の門にたどり着いたのと同時に、聖地につながっている向こうから小さな影だけが通り抜けてきた。

　なにもない平地に現れた黒い影は、不自然そのものだ。じろりとにらむと、間抜けなことに怯えを示して影が揺れた。

　この影の正体は明白だ。【魔】に堕ちた人間が使う影、原罪概念由来の異次元空間だ。【魔】のが影に隠れたまま、転移の門を通ってきたのだ。中にいるものをいまここで処理をしておくか迷ったが、時間が惜しい。

　予定外が、また増えた。内心で舌打ちをしながらは転移の門を抜けた。

　抜けてすぐに、吹きさらしになった聖地の光景が目に入る。

「……まだ、結界は戻っていないか」

　好都合だ。地脈の様子を見た感じ、もう少し時間がかかるだろう。自由に動ける時間が増えた。

　塩の大地で発動させた最後の魔導が無駄に終わることは、彼女自身知っている。あの程度で殺せるなら、とっくの昔に殺している。それでも、時間を稼ぐ必要があった。

　シラカミ・ハクアはこの世界でもっとも完全にして不死身に近い生物だ。

　肉体は損壊した先から再召喚を繰り返し、精神は他者へのを可能とする独立性を持ち、を繰り返そうとも摩耗しない魂の強度で、世界の龍脈に匹敵する【力】を内包している。

　もともと頂点にあった【白】の純粋概念が、四大の特性を取り込んだ結果が『主』だ。それ以外にも、この千年間で様々な純粋概念の特性を飲み込み続けている。いくら発展していたとはいえ、いくら『』の奥の手であっても、高威力の攻撃を直撃させたくらいで【白】が死ぬのだったら、古代文明はそもそも四大に滅ぼされていない。

　の本命は、あくまでも『塩の剣』だった。

「まさか、メノウに使われるとはな」

　渋い顔で、唯一の予想外をく。

　他の誰にも使わせないためにも、わざわざメノウの目の前で『塩の剣』を砕くパフォーマンスをしたのだが、結果だけ見れば逆効果に終わってしまった。

　これでは目的を達成することが不可能となった。

　ハクアに反逆したからには、『』もの立場ではいられない。相手はの『主』だ。ハクアは神官が持つ教典を通じて、すべての神官に指令を下せる立場にいる。

　致死の一撃を当てるために用意を続けた。動きを止め、塩の刃を突き刺して殺すつもりだった。機会が来るまで、温存に温存を重ねていた。確実に達成するために、準備に準備を積み重ね続けていた。

　二十年かけた暗殺は、空振りに終わった。

　だが積み上げたものが無駄になることなど、ごくごくありふれている。

　失望はない。期待をしていないからだ。失敗をしたのならば次の手を打つ。

　問題があるとすれば、一つ。

「……」

　ぐらり、と体がいだ。枝分かれさせた導力の枝で傷口をふさいだが、出血が完全には止められていない。じわじわと失血していた。

　避けようのない死が訪れている。自分の命が保たないことを自覚した。

　だが、やり残したことがある。

　は自身の導力を振り絞る。

『導力：接続── 短剣・紋章── 発動【導枝：世界樹】』

　短剣から伸びた【導枝】が巨大な導力の樹木になる。成長する大樹に押しのけられて、『龍門』と名付けられた駅のホームは破壊された。

　聖地が千年守り続けていたの一つ『龍門』は、完全に崩壊した。この世界に唯一残っていた存在を壊したに感慨の色はなかった。自分の目的を達成するためならば、どれほど重要だろうと貴重だろうと使いつぶしていくことに迷いはない。

　長距離転移は、もう発動できない。ハクアは大洋に置き去りにされた。いくら彼女でも、戻るのには時間がかかる。もう一つ、『星の記憶』も壊しておきたかったが、あの円柱形の建築物を破壊するには残りの導力が足りない。

「さて、と」

　導力迷彩によって目には映らないが、はハクアの目を盗んで塩の大地からひとつの荷物を持ち出していた。

「あとは、これをハクアの目から隠すだけだ」

　重さに顔をしかめながら、自らが統括する修道院へと歩き始めた。

　怒りに顔をゆがめながらも、ハクアはを追撃しなかった。

　メノウを押しのけたハクアは、アカリを確保するために近づき、膝を折って頰に触れて── 愕然とした。

「は？」

　すとんと表情が抜け落ちる。

　なんだと倒れたまま見ていると、ハクアが拳を振り上げて、アカリに叩きつけた。

　アカリの体が、砕け散った。いや、砕け散ったのはアカリの体ではない。

　そこに置かれていたのは、【導枝】に導力迷彩を施して視覚をいた、導力人形だ。

　確かにいたはずのアカリを持ち去ったのが誰かなど、考えるまでもない。

　『』だ。

　アカリが地面にうずくまっていたから気が付かなかったが、地面に穴が開いている。彼女は隙を突いてアカリと【導枝】を入れ替えていた。導力迷彩を施せば、目ではがアカリを持ち運びしているとはわからない。

　いつの間に入れ替えたのかという疑問は、あっさりと回答が浮かんだ。が教典から莫大な【力】を上空に放った時だ。あの瞬間は、メノウもハクアも完全に意識を上へと逸らしていた。はその隙に地面に【導枝】を通してアカリを回収し、導力迷彩を施して入れ替えたに違いない。

「ふざけんな……」

　茫然と、ハクアが振り返る。立ち去ったの方向だ。だがのことだ。もうすでに転移の門をくぐっているだろう。

　この時ばかりはハクアと同じ気持ちになっていたメノウは、ふと変なものを見つけた。

　小さな影だ。平地には影になるようなものはないのに、ぽつんと水たまりのように小さな影ができている。しかも、すすっと滑るように動いてメノウに近づいてくる。

　なんだあれ、と働かない頭が疑問を抱いた時だ。

　きらりと、月が瞬いた気がした。

「あ」

　空を見て、メノウは先ほどのハクアとの言い争いの意味を知った。

　最初は小さな泡だと思った。真昼の空に小さな白い点が、泡のように動いている。その泡から、流れ星が見えたと思った。流れ星がく間に巨大化して、こちらに向かってくることに気が付くのに数瞬かかった。

　そのわずかな時間で、メノウはなにもできなくなっていた。

　視界いっぱいに広がる光景に、なんの脈絡もなく思い出す。

　五イン硬貨。聖女マルタの伝説。硬貨に刻まれた泡を出す紋章魔導は、その伝説を模したものだ。

　月の奇跡を操る御業を伝える、一人の女の物語。

　亜音速を超えて天から降り注ぐ弾丸は、見るものに月の欠片が落ちてきたのではないかと錯覚させるほど巨大だ。

　逃げ場は、ない。

　メノウの目の前が、真っ暗になった。

　＊＊＊

　千年前の古代文明期。

　もっとも世界が発展した時代、人々が星々に至ったというのは誇張でもなんでもない。

　人倫を踏みにじる研究も横行し、世界の環境を支配して改変を繰り返した。四大によって崩壊する直前の文明は、一部の分野において地球文明すらも凌駕していた。

　それを証明するように、この星の衛星軌道上には一基の巨大な人工衛星があった。

　千年前に打ち上げられていた気象衛星や通信衛星のほとんどは、破損して宇宙のデブリとなっている。千年だ。石造りの建造物でもあるまいに、精密機器の結晶である文明機器が過酷な宇宙環境で稼働を続けるはずもない。

　そんな地球の常識を、古代文明の技術は覆した。

　古代遺物である軍事衛星は生きていた。

　稼働を続けている鍵は、導力の循環性と完全性にある。魔導学、素材学の両面から一部の隙なく導器を組み立て、【力】を完全に循環することで劣化をなくす。物体の不滅性の付与は古代文明期においても崩壊寸前にかろうじて実用化され始めた技術のため、この衛星のように巨大な導力施設はほとんど存在しない。

　千年前に打ち上げられた衛星は、無為に巡っていた。

　彼は強力な物理兵器だった。【力】の循環を完全にしたことにより経年劣化を防ぎ、搭載された導力知性体による制御で衛星軌道を保ち続ける。永遠にあり続ける可能性がある兵器だったが、残念なことに、兵器である彼よりも先に地上の文明が滅びてしまった。

　本当ならば月よりも遥かに小さい衛星として星の衛星軌道を回り続けるはずだった。

　そのあり方が変わったのは、ほんの二十年前だ。

　彼という軍事衛星は、地上からの干渉に見舞われた。導力生命体によるハッキングを受けたのだ。

　地上より放たれ、光による通信に乗って彼のいる導力回路に住み着いた存在は、時間をかけながら徐々に支配範囲を広げていった。もともと衛星軌道の制御機構として組み込まれていた彼と同化して、彼は彼女になりつつあった。

　彼と混じり合った彼女は、かつて友人と旅をしていた時に、多くのことを知った。古代文明期の興亡と技術。異世界人召喚の仕組み。日本送還に必要な犠牲の量。それを知りながら、この世界から日本に帰ろうとしている存在。

　旅をした末に、一つの結論を出した。

　シラカミ・ハクアを止めなければならない。

　だがその時に、純粋概念の持ち主であった彼女はとなりかけていた。

　だからこそ、肉体を捨てる決意をした。聖女マルタの伝説を追っている時に、古代文明期に飛ばされた軍事衛星に関する資料を発見していた。最後の記憶を費やし、【光】の純粋概念を通信面で活用することで衛星にハッキング。【光】の魔導を巡らせ続け、彼女の魂は長い時間をかけて衛星に搭載された導力生命体と同化した。地上に残された肉体は暴走を始め、彼女の友人によって塩と化した。

　そして兵器起動のため、同化した精神の一部を友人の教典に宿した。

　この衛星は、軍事衛星である。かつての保有者、聖女と呼ばれたマルタによって数度、使用されたものの兵器たる武威は残存していた。

　超高々度からの、極超音速飛翔体の投下。

　この世界に現存する兵器としては、もっとも破壊規模が大きく、防ぐことも不可能に等しい。

　目標地点への弾着を確認した衛星は、また無為に公転する。

　すでに地上とつながる端末はなくなった。

　完全に近い兵器は、今度こそ静かな衛星となって、星の巡りに加わった。

　 ＊＊＊

　同時刻。

　モモは完全にふて腐れていた。

　フーズヤードに閉じこめられて、三十分近く経過している。暴れる無駄さを知らされ文句も尽きて、嚙みつかんばかりにフーズヤードをにらむことしかできない。

　聖地周辺の地脈の整備に没入していたフーズヤードが、不意に顔を上げた。

「よし」

　まさか、と思う。

　モモの胸に焦りが生まれる。メノウはまだ、帰ってきていない。それなのに、まさか。だがいくら焦燥にあぶられようとも、いまのモモにできることはない。

　反面、フーズヤードは己の仕事を成し遂げた。

「できたぁっ！」

　フーズヤードが歓声を上げた瞬間。

　白い街並みが浮かび上がって顕現し、結界都市の姿を取り戻した聖地に、モモは絶望した。

　そして。

　メノウは魂の抜けた心地のまま白い街並みを一望できる場所にいた。

　いま茫然自失として座り込んでいる場所は、聖地に続く、最後の巡礼路。少し道が広くなった場所だ。

「バカじゃないのバカじゃないのバカじゃないの!?」

　絶叫しながらも後ろからメノウを抱えているのは、サハラだ。彼女に運ばれるのは二度目だ。サハラのりに、まだ自分が生きていることが信じられないメノウは茫然としたまま反応を返せない。

「なにあれ!?　なんかあんたによく似た異世界人がいたし、は片足なくなってるしッ、挙句の果てに、空から月が降ってきたしッ？　意味がわからないわ！　なにがどうなってるの!?　ねえ！」

　そう。

　天から無数の飛翔体が降り注いだ瞬間。メノウが自分の死を覚悟する間もなかった。メノウのあらゆる想定と対応できるレベルを超えた攻撃だった。

　思考が停止するしかなかったメノウを救ったのが、サハラだった。

　メノウは忍び寄ってきた影から現れたサハラに、異次元空間へと引きずり込まれた。

　原罪概念魔導の召喚を応用した影移動だ。転移のような真似はできないが、平面になって地面を歩く速度で動ける。サハラはそれに隠れてメノウに近づいた。

　だが原罪魔導がつくる魔界と呼ぶべき空間は物理干渉を遮断できない。本来なら天から降ってきたなにかに木っ端微塵にされて死んだはずだが、そこからさらに、影の空間を丸ごと召喚された。

　眷属召喚は距離に囚われることがない転移の一種だ。サハラはメノウを影に巻き込むことで、窮地を脱した。

「あー……えと、サハラ」

「なに!?」

「迎えに来てくれて、ありがと」

「死ね！」

　まだ落ち着きから程遠いようで、涙目での絶叫だった。サハラらしい即答である。

　ふふっと無意識に唇がほころび、メノウの心が正体を取り戻した。ようやくまともに思考が回転を始める。

「モモは？」

「死んだわ！　いい気味よねっ」

「よかった、モモも無事なのね」

　本当にモモが死んでいたら、サハラのことだ。もっととして具体的な状況を語り聞かせてくる。まだ興奮が収まらないサハラの様子からして、かわいい後輩の無事は間違いないと、ほっとする。

　それにしても、と改めてサハラを見る。彼女のことだから、てっきりとっくに逃げているものだと思っていた。

「嫌味じゃないから落ち着いて聞いてほしいんだけど、なんで来てくれたの？」

「……脅された。じゃなきゃ、メノウなんかを迎えに来るわけがない」

「脅されたって……誰に？」

　徐々に心が落ち着いてきたのか、サハラの口調のトーンが戻る。

　モモではないとなると、サハラを脅してまで自分を助けてくれる相手に心当たりがない。

「あたしに」

　声が響いた。

　暗闇から、ふわりと着物の裾が浮く。翻る白い衣装にマノンだろうかと勘違いしてから、相手の背の低さに気がつく。

　そもそもサハラを眷属として手元に召喚できる存在は、彼女の肉体に原罪概念を打ち込んだ存在に他ならない。

「『』……？」

「次にその呼び方したら、オコだから」

　年齢相応にな頰が、ぷくぅっと膨れる。

「サハラが隠れて移動するための影を貸してあげたのだってあたしなんだから、もっと感謝していいわよね。そうじゃなきゃ、サハラなんかとっくに捕まって迎えになんてこれなかったもの」

「え、あ、うん」

　あまりに意外な対応に、目が瞬く。

「なにかしら、その反応。あたしの髪だって、こんなに短くなっちゃったのよ？　生贄に使った分は、あなたの働きで返してもらうんだから」

　服装の変化もそうだが、いつか会った時よりも彼女の髪が短くなっていることに気がついた。二つに縛っていた髪が、いまはショートカットに近い長さになっている。

「あたしにはもちろん、マノンにだって感謝してよね。あの子は、その……ちょっと頭おかしかったけど、家族想いだったもん。あの子が命を懸けた結果に、いまのあたしがいるのよ。あなたが助かったのも、マノンのおかげだって言えるんだから」

　彼女はワンピースの胸に空いた穴を埋めるように胸に手を当てる。

「あたしの名前は。摩耶」

　原罪概念の原初にして万魔の主を名乗ると同じ顔でありながら、ただのおしゃまな女の子といった振る舞いでメノウを見る。

「これからあたしのことは『』じゃなく、マヤって呼んでね？」

ほんの小指であれど、から意識を取り戻した幼い少女は名乗りを上げた。

